

市民と市長との対話集会会議録【要旨】

※生成 AI による要約を行なっています。

令和 7 年 8 月 21 日 中津東十六区及び中央区

司会

JR 中津川駅前の再々開発をテーマとした対話集会を開催する。

代表者

にぎわいプラザの解体に関して市長との対話の場を設けた。令和 6 年 7 月から 6 回程度、関係者や東工大教授、副市長らと会議を重ねてきた。地元住民として、美しいまちを子どもたちに残すため、ワクワクするような魅力あるまちづくりに向けて率直な意見を求める。

市長

今日で 37 回目の対話集会となる。以前の市政懇談会とは異なり、一方的な要望受付ではなく、市民との対話を重視している。駅前中心市街地の活性化は大きな課題であり、地元住民の意見を聞きたい。

鷹見市議会議員

にぎわいプラザ跡地利活用検討委員会にオブザーバーとして参加した。検討委員会は終了し、次の段階に移る。1 回目の再開から 48 年が経過しており、新しいまちづくりを目指す。

参加者

跡地活用の進捗状況について関心がある。ホテルかマンションかという話題が常に出る。駐車場の確保がなければ何を作っても意味がない。半世紀前の再開時は沼地で工事が困難だった。解体時の弊害やアスベスト問題を心配している。栄町はにぎわいプラザで電波障害や日照権問題など辛酸をなめてきた。

商業課長

にぎわいプラザは約 50 年前の駅前再開で整備され、平成 12 年に市が取得した。公共施設再編計画で令和 9 年 3 月末に用途廃止する方針。令和 6 年度から検討委員会を設置し、基本構想を策定した。駅前空間の新たなにぎわい創出を目指し、観光案内機能、特産品 PR 販売機能、待合機能の 3 つを重視する。短期・中期・長期の視点で段階的に整備を進める。

市長

基本構想は決まったが、具体的な跡地活用は未定である。駐車場や送迎車の流れ

も検討課題。にぎわいプラザ跡地だけでなく、駅前広場や周辺土地を含めた一体的な開発が必要。レンガビルも老朽化しており、長期的視点での検討が必要。解体は令和 8 年用途廃止後に実施予定で、地域住民への説明を行う。

参加者

西側の再開発を先に行い、地権者をにぎわいプラザに移してから西側を整備し、その後にぎわいプラザを解体する方法を提案する。100 年かけて形成されたまちを安定させるには時間がかかる。坂本の開発と並行すると予算的に困難になる。

参加者

西側を先にやるべきという意見は理解できるが、手を広げすぎると前に進まない。まずにぎわいプラザを壊し、駅前広場ゾーンを整備する。大手デベロッパーの参入が必要。多治見駅前のような商業ゾーンとマンション・ビジネスホテルの組み合わせをイメージする。

参加者

明治 30 年の駅開設時から複雑な土地事情がある。

市長

段階的な開発が必要で、にぎわいプラザ解体は数年かかる。将来的な駅前の絵を描いた上で順番に進めることが重要。すぐに一度にはできないことを理解してほしい。

参加者

にぎわいプラザの解体時期と、にぎわい特産館の移転先について質問する。

市長

令和 7 年に解体調査、令和 8 年度に設計、令和 9 年から 2 年程度で解体予定。観光案内所と待合スペースは JR 駅舎内への設置を検討中。にぎわい特産館は駅前での適地が限られており、レンガビル酒屋跡や V ドラッグ跡などを候補として検討している。

参加者

10 年先を考えると長すぎる。スピーディーに 1 つずつ解決してほしい。

市長

できるものから順番に進める。

参加者

100 歳時の中津川を考えた長期的視点が必要。イベントスペースと防災拠点兼ねた施設を希望する。駅を利用した交流人口の活用を提案する。

市長

にぎわいプラザ 5 階のような多目的スペースが解体後になくなる。数百人規模のイベントスペースは必要だと考える。

司会

駅と駅前広場、にぎわいプラザなどの連携がとれていない。観光客の路上駐車と送迎車で駅前が麻痺する。小川町側への動線確保が課題。

参加者

小川町側も含めた広域での検討が必要。送迎を小川町側に誘導するには利便性の向上が必要。

参加者

にぎわいプラザ建設時にアルバイトで参加した思い出がある。階数を減らしてでも残してほしい。

市長

ダイエー用に設計された建物の利活用は困難。50 年使い続ける覚悟で判断が必要。

参加者

観光バス増加で駅前ロータリーが混雑。噴水を撤去すれば観光バス 2 台分の駐車場になる。緊急対応が必要。

市長

観光バスや駐車問題への対策が必要。バスレーンやタクシープールの必要性も再検討する。

参加者

バス会社減少とタクシープール利用減により、駅前広場ゾーンの再開発を求める。

参加者

リニア開業後の利用者誘導策が必要。中津川独自の魅力として伊藤潤二氏などの活用を提案する。

市長

坂本リニア駅と差別化した特色ある中心市街地が必要。中山道は継続的魅力を持つ。伊藤潤二氏や村上康成氏など地元出身者の活用を検討している。

参加者

まちなか住民が参加できる祭りの復活を希望。昔の駅前盆踊りのような情緒ある催しを求める。

市長

地域発信の祭り復活を応援する。坂本でも同様の要望がある。

参加者

居住地や職業による異なるニーズへの配慮が必要。解体時の交通規制や安全確保への不安がある。丁寧な説明と対応を求める。通勤通学者が70%を占める駅利用者への配慮も必要。

市長

今後はより丁寧な対応と説明を行う。駅前全体を俯瞰した開発を進める。

参加者

解体は大事業であり住民理解が不可欠。継続的な対話集会や説明会の開催を要望する。

市長

具体的決定事項が少ない中での開催となった。中心市街地活性化は長年の課題で、人が歩いて回るにぎわいが重要。にぎわいプラザだけでなく広域的な中心市街地づくりが必要。住民や事業者からの継続的な意見聴取を行いながら、短期・中長期的な取り組みを進める。